

## 【実践報告】

# 教員養成課程における 国際交流学習を通した新たな視点の獲得

山田 有希 (長崎大学教育学部)  
岸 磨貴子 (明治大学国際日本学部)  
瀬戸崎 典夫 (長崎大学教育学部)

## 1. はじめに

近年、急速なグローバル社会の進展に伴って、政治・経済・文化の面で国際的な交流が進んでいる<sup>[1]</sup>。例えば、2018年の11月2日には、単純労働を含む外国人労働者の受け入れを拡大する出入国管理改正法案が閣議決定された。また、JNTO（日本政府観光局）の推計によると、2018年12月18日時点で訪日外国人観光客は史上初の3000万人を記録した。JNTO理事長は、2020年には訪日外国人観光客4000万人を目指し掲げており、これまで以上に日本に訪れる外国人が増加することが見込まれる。そのため、多様な背景を持つ人との交流が増すことが考えられ<sup>[1]</sup>、進展していくグローバル社会の中で、諸外国との交流や協力を一層充実させていくことが重要である<sup>[2]</sup>。

グローバル社会では、多様な背景を持つ他者に対し、自分の考えを分かりやすく伝え、価値観の違いを理解し、相互作用的に新しい価値を生み出す人材が求められている。経済産業省は、このような人材を「グローバル人材」と定義しており<sup>[3]</sup>、国際的に活躍できるグローバル人材の育成が急務だと考えられる<sup>[4]</sup>。

「グローバル人材」の育成に言及すると、初等中等教育からの積み重ねが必要であり、多様な考え方や、異文化理解力を養うことが重要である<sup>[3]</sup>。また、グローバル化を児童・生徒に意識づけることも重要だと考えられている<sup>[5]</sup>。さらに、グローバル人材を育成する上で、教員の資質能力も必要だと述べられている<sup>[6]</sup>。文部科学省が掲げる、教員に求める国際社会で必要とされる基本的資質能力に、「考え方や立場の相違を受容し多様な価値観を尊重する」力が含まれている<sup>[7]</sup>。さらに、グローバル化などの新たな課題に対応できる力も求められており<sup>[8]</sup>、教員がグローバルな見方・考え方を持つことの重要性が示唆されている。グローバルな見方や考え方を養う実践として、教員に対する海外交流授業や相互訪問などがあり、他者を尊重する大切さや国際交流の良さについて認識できたという効果が挙げられている<sup>[9]</sup>。しかし、すべての教員に対して海外交流授業や相互訪問の機会を提供することは現実的ではない。したがって、教員養成課程の段階で国際交流や国際経験の場を提供することは意義があると言えよう。

一方、大学生が参加する国際交流についての事例や効果は多数挙げられており、岡山大学でのイングリッシュ・カフェの実践報告や<sup>[10]</sup>、大学1年生を対象とした国際交流プロジェクトなどが報告されている<sup>[11]</sup>。しかしながら、教員としての資質能力の向上をねらいとし

た、国際交流学習についての研究は希少である。そこで、本研究は教員養成課程の学生を対象とした国際交流学習を実践し、教師教育における本実践の意義について検討した。

## 2. 方法

### 2.1 実践方法

本研究では、教員養成課程の学生 11 名、教職大学院生 11 名の計 22 名を調査の対象とした。なお、教職大学院生には、3 名の現職教員が含まれていた。

交流会では、まずシリア難民 A 氏による講話を約 30 分間実施した。図 1 に A 氏が講演している様子を示す。講話の主な内容は、「シリアの首都・ダマスカスの紹介」、「シリアで起きた内戦について」、「難民の受け入れ状況について」、「日本に訪れて感じたこと」、「現在の活動について」であった。「現在の活動について」では、A 氏による講演活動などの情報発信に関する話があった。

次に、20 分程度の質疑応答の時間を設けた。質疑応答では、「難民登録できた理由」、「難民受け入れの規準」などの難民登録の実態に関する質問がされた。他にも、「情報発信をすることによる変化について」や「テロや戦争が無くならないこと」などに対する言及があった。

最後に、15 分程度のグループ議論の時間を設けた。図 2 に議論をする参加者らの様子を示す。4~6 名で構成されたグループを 1 グループとして、合計 6 グループを設けた。議論のテーマは、「講話を聞いて感じたこと」および、「教師として関わる自分に何ができるか」であった。



図 1 シリア難民 A 氏による講話の様子



図 2 学生たちが議論をする様子

### 2.2 評価方法

#### (1) アンケートによる主観評価

国際交流学習に参加した学部生と教職大学院生の計 22 名を対象に、アンケート調査を実施した。アンケート項目は、「内戦・難民・A 氏による情報発信についての講話に関して(4 項目)」、「講話で感じたことについての議論に関して(2 項目)」の全 6 項目であった。また、各質問項目に対して、「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「全く

「そう思わない」の4件法による回答を得た。得られた回答を肯定回答（とてもそう思う、ややそう思う）と否定回答（あまりそう思わない、全くそう思わない）に分類し、直接確率計算（両側検定）によって分析した。さらに、国際交流学習全体を通しての感想について、自由記述によって得られた回答をカテゴリーに分類した。

### (2) インタビューによる発話からのカテゴリー抽出

国際交流学習に参加した22名のうちの5名（学部生2名/学部生①②、大学院生2名/院生①②、現職教員1名/現職院生①）に対してインタビューを行った。インタビュー内容は、シリア難民A氏の講話や議論を聞いて考えたことについてである。また、インタビューによって得られた発話を録音し、書き起こしてカテゴリーに分類した。

### (3) グループ議論における発話の抜粋

A氏の講話および質疑応答の後に、議論を行った6つのグループの発話を記録した。本研究では、6つのグループから2グループの発話を抽出し、結果の補足として加えることとした。グループメンバーの属性を表1に示す。また、発話内容を文字データとして書き起こした。グループ議論は、A氏の講話を聞いた後に約15分間実施した。なお議論の内容は、「教師として関わる自分に何ができるか」についてであった。

表1 グループメンバーの属性

	メンバーの属性
グループA	学部生2名(学部生③④) 大学院生2名(院生③④)
グループB	学部生1名(学部生⑤) 大学院生1名(院生⑤) 現職教員2名(現職院生②③)

## 3. 結果・考察

### 3.1 アンケートによる主観評価

表2に講話・議論に関するアンケート調査の分析結果を示す。なお、有効回答は22件であった。直接確率計算の結果、すべての質問項目において肯定的な回答が有意に多く、否定的な回答をした参加者は0名であった。講話に関する質問4項目において、「興味深い講話だった」、「講話の内容について深く学びたい」についてもすべて肯定回答であったことから、今回の国際交流学習は、参加者の内戦や難民に対する興味を促すとともに、学習意欲を高めるものであったことが示された。さらに、「本日の講話は教師として役に立つ」、「講話を聞いて新たな視点を獲得した」に対し、参加者全員が肯定的な評価を示したことから、今回の国際交流学習は、教師としての視野を広げる学習であったことが示唆された。また、議論に関する質問項目においても、すべての参加者より肯定的な評価を得たことから、講話を聞くだけでなく、議論をすることの重要性が明らかになった。

表 2 A 氏の議論・講話で得た評価

質問項目	肯定回答(人)		否定回答(人)		結果
	とてもそう 思う	ややそう 思う	あまりそう 思わない	全く 思わない	
<b>内戦・難民・A氏による情報発信についての講話に関して</b>					
興味深い講話だった	21	1	0	0	**
本日の講話は教師として役に立つ	20	2	0	0	**
講話の内容についてさらに深く学びたい	18	4	0	0	**
講話を聴いて新たな視点を獲得した	17	5	0	0	**
<b>講話で感じたことについての議論に関して</b>					
本日の議論は教師として役に立つ	18	4	0	0	**
議論をして新たな視点を獲得した	17	5	0	0	**

\*\*:p&lt;0.1

表 3 に交流会終了直後に得たシリアや難民の講話・議論に関する感想についての集計結果を示す。得られた回答の合計は 30 件であった。もっとも多かった感想は、「新たな視点の獲得」、「直接交流からの学び」であり、6 件の回答を得た。「新たな視点の獲得」の具体的な回答として、「新しい発見があった」、「捉え方や考え方方が全く異なることを実感した」などが示された。「直接交流からの学び」の具体的な回答として、「実際に生の声を聞くことで考えることができた」、「生の声を聞くことができて、とてもためになった」などが挙げられた。したがって、国際交流学習は、参加者の視野を広げ、直接交流の重要性を実感できる経験であったことが示唆された。また、「教育との関わりを考察」、「知識の獲得」、「シリア難民への興味」、「知ることの重要性を認識」について、それぞれ 3 件の回答を得た。「教育との関わりを考察」の具体的な回答として、「これから教師となる自分が子どもたちに何を伝えればいいのか、何を考えさせればいいのかなど考えた」、「教育する段階で世界に目を向けることが大切だ」などが挙げられ、参加者が教育者目線で内戦や難民問題について考察したことが示された。「知識の獲得」に関する回答例として「今まで知ることができなかつたものを聞くことができた」などが挙げられた。また、「知ることの重要性を認識」について、「きちんと知る必要があると感じた」、「知らないことを学ぶことの重要性を感じた」などが挙げられた。したがって、参加者は内戦や難民の知識を獲得し、新たな知識を取り入れることの重要性を感じたことが推察された。

表3 シリアや難民の講話・議論に関する感想

カテゴリー名	回答数	記述回答例
新たな視点の獲得	6	・新しい発見があった ・捉え方や考え方が全く異なることを実感した
直接交流からの学び	6	・実際に生の声を聞くことで考えることが出来た内容だ ・生の声を聞くことが出来て、とてもためになった
教育との関わりを考察	3	・これから教師となる自分が子どもたちに何を伝えればいいのか、何を考えさせればいいのかなど考えた ・教育する段階で世界の現実に目を向けることが必要だと思った
知識の獲得	3	・今まで知らなかつたことなどを聞くことが出来てよかったです
シリア難民への興味	3	・シリアについて学んだことが初めてで、とても興味深く感じた ・難民の受け入れは興味深かった
ることの重要性を認識	3	・まことに知る必要があると感じた ・自分の知らないことを学ぶことの重要性を感じた。
その他	6	・今までに体験したことないような経験だった ・情報発信等でコミュニティを作っていくことが出来たら、何かアクションが起こせそうだなと思った ・さらに調べたり知つたりしたくなる
合計	30	

### 3.2 インタビューによる発話からのカテゴリー抽出

表4にインタビュー項目である「シリアや難民に関する話を聞いて考えたこと」に対する発話記録を示す。カテゴリーでもっとも多かったのは、「知識の獲得」と「さらなる知識獲得の欲求」に関する発言だった。「知識の獲得」では、院生①が「難民とか、そういう知識とか全くなかった」と述べた。また、「事実を知らなかつたから、知れたのは良かった」と述べた。「さらなる知識獲得の欲求」に関する具体例として、院生①の「もうちょっと知っておきたい」、学部生②の「もっと深いところまで話を聞きたかった」などが挙げられた。したがって、今回の交流学習では、内戦や難民に対する知識を獲得し、学習意欲を高めることが示唆された。

カテゴリー名「新たな視点の獲得」に関する発言では、学部生①が「新しい景色、理解が生まれた」、「原爆だけにとどまっちゃだめだなと思った」と発言した。また、院生②が「自分から動いて伝えることは必要」と述べ、自分から動くことの大切さについて考察した。これらのことから、A氏との直接交流により新たな視点や考え方を獲得したことが示された。

カテゴリー名「話者に対する自己解釈」では、現職院生①が「Aさんはすごい立場の人」、「ごく一部の限られた人」と述べた。この発言は、A氏がメディアで活動していることや、日本に受け入れられた数少ない難民のひとりであることに関して述べたものだと推察される。関連して、「シリア難民に対する自己解釈」についても発言し、「多分、普通の人は難民になることもできないし、国から出ることもできない」、「そういう人たちが多いんだろうな」と、A氏の実情を踏まえた上で、難民問題について考察した。

カテゴリー名「教育との関わりを考察」について現職院生①は、「学校で扱うのはすごく難しいだろうな」、「自分が体験したことは言えるが、そうじゃないことを扱うのは難しい」と

述べた。「教育との関わり」についての発言は現職院生①からのみであり、教職経験があるからこそ、国際交流学習で得た学びを教育で扱うことに難しさを感じたことが推察された。カテゴリ一名「知識不足から生じる無力感」では、学部生②が、「シリアに関して自分の知識が全くないから、考察ができない」と述べ、内戦や難民について知識不足を感じ、ネガティブな感情を見せた。

表4 シリアや難民に関する話を聞いて考えたことに関する発話記録

カテゴリ名	発話記録例
知識の獲得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・難民とかそういう知識とか全くなかったから、紛争とか戦争とか、日本は難民の受け入れがすごい厳しいとか(院生①)</li> <li>・事実を僕は知らなかつたので、そういうことを知れたっていうのは良いこと(院生①)</li> </ul>
さらなる知識獲得の欲求	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと深いところまで話を聞きたかった(学部生②)</li> <li>・もうちょっと知っておきたいなって思った、疑問はわく(院生①)</li> </ul>
新たな視点の獲得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かなり新しい景色というか理解が生まれた(学部生①)</li> <li>・原爆だけにどまっちゃだめだなと思った(学部生①)</li> <li>・自分から動いて伝えることとかしていくことは必要なのかなって思った(院生②)</li> </ul>
話者に対する自己解釈	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A氏はすごい立場の人なんんですけど、でも、ごく一部の限られた人なんだろうな(現職院生①)</li> </ul>
シリア難民に対する自己解釈	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通の人は難民になることもできないし、国から出ることもできない(現職院生①)</li> </ul>
教育との関わりを考察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校で扱うのはすごく難しいんだろうな(現職院生①)</li> <li>・自分が体験したことは、自分の体験として言えるんだけど、そうじゃないことを扱うのは、難しいよね(現職院生①)</li> </ul>
知識不足から生じる無力感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シリアに関して自分の知識が全くないから、考察が出来ない(学部生②)</li> </ul>

### 3.3 グループ議論における発話の抜粋

グループ議論は、6 グループ中 2 グループを分析の対象とした。「教師として関わる自分に何ができるか」について議論した発話記録を示す。

#### (1) 「直接経験の重要性を認識」に関する発話記録

表5にA グループの発話を示す。A グループでは、最初に院生③が、発話 ID A01 で「調べ学習ができる」と述べた。それに対して、グループの全員が「調べるだけでなく、直接経験をすることが重要である」と発言した。例えば、学部生③は、発話 ID A02 で「起こった

表5 A グループの「直接経験の重要性」に関する発話

発話 ID	発話者	発話記録
A01	院生③	何が出来るかで考えたら調べ学習はできる。(中略)
A02	学部生③	調べ学習は何をしたか印象がない。映画とかを見せたら、自分的に印象に残る。高校生の時に見た飛行機事故の映像が今でも記憶に残っているから、起きたことを実際に目で見ることって大事。
A03	院生③	調べ学習は、インターネットとかではなく、実際に現地を巡ったり、語り部さんの話を聞いて生の声を聴いたりがあった。現物に触れることが大事だと思います。
A04	院生④	そういうことが出来る時間が学校にあればいいな

ことを実際に目で見ることって大事」と述べた。続いて、院生③が、発話 ID A03「調べ学習は、実際に現地を巡ったり、語り部さんの話を聞いて生の声を聴いたりがあった。現物に触れることが大事」と述べた。発話 ID A02, A03 の発言に、院生④は「そういう時間があればいいな」と共感した。したがって、A グループの議論では、直接経験が重要であると考えたことが示された。

### (2) 「知ることの重要性」に関する発話記録

表 6 に A グループの発話を示す。学部生④は、発話 ID A05 で「シリアや世界のことになるとインターネットやテレビで得た情報を信じてしゃべることが子どもたちにあると思う。多面的なところを教師が助ける。付け加えや補足を教師がしていかないといけない。」と発言した。それに対し、院生③、院生④、学部生③も同様に、発話 ID A06 「自分が持っている知識が正しいか分からなければ、本当にちゃんと調べないといけない」、発話 ID A08 「学生のうちに知っておくことが必要」、発話 ID A09 「いろんなこと知ってた方が良かったと大学生になってから思っている」と述べた。したがって、A グループの議論の中で、子どもに情報発信するために、様々なことを知ることの重要性について考察したことが示された。

表 6 A グループの「知ることの重要性」に関する発話

発話 ID	発話者	発話記録
A05	学部生④	実際のものに触れられることは大事だと思うんですけど、シリアや世界のことになるとインターネットやテレビで得た情報を信じてしゃべることが子どもたちにあると思う。調べても、内戦の事ばっかりが出てくるように、多面的なところを教師が助ける。実際はこうなんだなどの付け加えや補足を教師がしていかないといけない。
A06	院生③	自分が持っている知識が正しいか分からなければ、本当にちゃんと調べないといけない。
A07	学部生③	主観とかも入りそう。
A08	院生④	だからこそ学生のうちに知っておくことが必要。
A09	学部生③	子どものうちにいろんなことを知っていてほしい。すごく詳しいとかじゃなくていいから、こんなこと知ってた方が良かったと今大学生になってから思っている。

### (3) 「教師が与える影響力について考察」に関する発話記録

表 7 に B グループの「教師が与える影響力」に関する発話を示す。現職院生②は、発話 ID B01 で「私が考えていることが子どもたちに影響を与えているということがあつてバランスが難しい」と述べた。現職院生②の発話に対し、現職院生③が、発話 ID B02 「難民受け入れの解釈は、先生の解釈で変わってくる。」と発言し、教師が与える子どもへの影響力について考察した。現職院生②と③は、現職教員であり、自分の実際の体験を踏まえた発言をしたことが推察される。

表7 B グループの「教師が与える影響力」に関する発話

発話 ID	発話者	発話記録
B01	現職院生②	先生はそういうことを考えてる人間であって、そういう人が教壇に立つことでかなり影響を与える。私が考えていることが子どもたちに影響を与えているということがあってバランスが難しい。どういう位置づけで扱うのか？できることってすごく少ない。
B02	現職院生③	難民受け入れの解釈は、先生の解釈で全然変わってくる。「こんなに受け入れている」「これだけしか受け入れていない」といって、受け入れてないからもっと受け入れようという話ではない。今の現状を分かったうえで話を進めていかないといけない。

#### (4) 「教育に活用する難しさを認識」に関する発話記録

表8にB グループの「教育に活用する難しさを認識」に関する発話を示す。B グループの現職院生②は、発話 ID B03 「ゴールをどこに定めるかが難しい」と発言した。この発言に対し、院生⑤が発話 ID B05 「僕たちにできることは何だろうって考えることがゴール」と述べたが、現職院生②は、発話 ID B06 で「僕たちにできることを書けた子がいいのか、そこが難しい。評価をどうすればいいのか分からなかった。」と意見した。同様に、現職院生③は、「考えさせることぐらいしか思いつかない」と評価の難しさについて発言した。現職院生②, ③は、現職教員であることから、実際の授業や子どもの実態を視野に入れながら、評価や授業設計に関する難しさを述べたと推察できる。なお、評価の難しさに関する発言は、B グループの現職院生②, ③からの発言だけであったことから、現職教員だからこそ感じた教育への活用の難しさであることが示された。

表8 B グループの「教育に活用する難しさを認識」に関する発話

発話 ID	発話者	発話記録
B03	現職院生②	ゴールをどこに定めるのかが難しい。ゴールがないと思っているが、ゴールがないことを子どもたちにたくさんやらせてしまつていいのか？
B04	現職院生③	自分はこうっていうのが大事なのかな。考えさせることぐらいしか思いつかない。
B05	院生⑤	教育っていう目標の中で言えば、僕たちにできることは何だろうって考えることがゴール。。
B06	現職院生②	そうなったときに僕たちにできることを書けた子がいいのか、そこが難しい。できることなんて何もないって考える子もいる。そういうところの評価ってどうすればいいのか全然わからなかった。

#### 4. 総合考察

アンケート項目の「本日の講話は教師として役に立つ」において、すべての参加者から肯定的な回答を得た。また、自由記述の回答例として、「教師となる自分が子どもたちに何を伝えればいいのか、何を考えさせればいいかを考えた」、「教育する段階で世界の現実に目を向けることが必要だと思った」が挙げられた。したがって、多くの学生が今回の国際交流学習を教育と関連させて考察したことが推察された。また、グループ議論やインタビューでの、

「現物に触れることが大事」、「自分が体験したことは言える」などの発言から、自分が体験したことによって、国際交流学習を教育に取り入れる利点や重要性を感じたことが示唆された。しかし、大学での国際交流学習の事例はあるものの、時間や場所の確保等が必要であり、容易に行えるものではない。一方、海外との遠隔交流授業なども盛んに行われており<sup>[12]</sup>、ICTを活用することで、比較的容易に異文化の人と交流できる。したがって、教員養成課程の学生らに対してもICT機器を使うなどして、国際交流が簡単に行える場所や機会を提供していくことも重要であろう。

アンケート項目の「講話の内容についてさらに深く学びたい」、「講話を聞いて新たな視点を獲得した」においてすべての参加者が肯定的な回答をした。また、自由記述による感想とインタビューで、「交流会での学び」、「新たな視点の獲得」に関する回答が多かった。具体的には、「事実を知れた」、「新しい発見があった」、「新しい景色、理解が生まれた」などが挙げられた。国際交流学習によって学習者が新しい知識を獲得するとともに、学習者の新たな視野の広がりを促すことが推察された。さらに、教育と関連させて考察した学生も多かつたことから、教員養成課程を対象とした国際交流学習は、教師としての知見の獲得や視野の広がりを促す上で有効であることが示された。したがって、新たな視点の獲得という点において、国際交流学習はグローバル社会に対応できるような教員の資質能力の育成に寄与し得ることが考えられる。

一方、「教育に活用する難しさ」について多くの意見が述べられた。例えば、インタビューの回答では、「学校で扱うのは難しい」、グループ議論では、「ゴールをどこに定めるかが難しい」、「子どもたちに伝える時のバランスが難しい」などが挙げられた。特に現職教員は教育に関連した発言が多く、「評価の仕方が分からない」、「先生の解釈で伝わり方が違うから難しい」と発言した。したがって、多くの参加者らが国際交流学習を教育に活用する難しさを感じていることが示唆された。また、教職経験がある院生は、授業や子どもの実態などを踏まえて考察し、国際交流学習を教育に取り入れることに、具体的な難しさを感じたことが示された。多くの参加者らは、今回の交流学習にポジティブな反応を示すとともに、国際交流学習を教育に活用することに困難さを抱いていることが推察された。したがって、初等中等教育における国際交流学習の授業デザインや評価の観点などについても検討していく余地がある。

## 5.まとめ

本研究では、教員養成課程の学生を対象とした国際交流学習を実践し、教師教育における本実践の意義について検討することを目的とした。アンケートによる主観評価やインタビューおよび、グループ議論による発話から、今回の国際交流学習は、直接交流の重要性を認識させ、教師としての新たな視点の獲得を促すことが示唆された。したがって、国際交流学習は、グローバル社会に対応できる教員の資質能力の育成に寄与し得ることが示された。

今後の課題は、教員養成課程の学生に対し、ICT機器を用いるなどして国際交流学習の機

会を提供することや、学校教育における国際交流学習の授業デザインや評価の観点などについて検討することである。

## 参考文献

- [1] 沼田潤 (2012) “大学生における異文化理解の現状” 人間環境学研究, **10** (2) : 55–63
- [2] 文部科学省 (2017) 平成 29 年度文部科学白書 “第 10 章 国際交流・協力の充実”  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab201801/1407992\\_017.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201801/1407992_017.pdf)  
(参照日 2019. 1. 24)
- [3] 産学人材育成パートナーシップグローバル育成委員会 (2010) “産学官でグローバル人材の育成を（報告）” [http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san\\_gaku\\_ps/2010globalhoukokusho.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf) (参照日 2019. 1. 24)
- [4] 文部科学省 (2013) “第二期教育振興基本計画” [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail) (参照日 2019. 1. 24)
- [5] 武田明典, 渋谷由紀, 小柴孝子 (2017) グローバル教育尺度開発の試み一小・中・高校教師による児童・生徒への期待獲得—、グローバル・コミュニケーション研究, (5) : 127–147
- [6] 松井典夫 (2018) 教師教育の視座における国際理解教育の必要性への考察—教職志望学生の開発途上国研修におけるテキストマイニングから—、奈良学園大学紀要, (9) : 137–146
- [7] 文部科学省 (2006) 中央教育審議会答申 “今後の教員養成・免許制度の在り方について” [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1336999.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1336999.htm) (参照日 2019. 1. 24)
- [8] 文部科学省 (2012) 中央教育審議会答申 “教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について” [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afIELDfile/2012/08/30/1325094\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afIELDfile/2012/08/30/1325094_1.pdf) (参照日 2019. 1. 24)
- [9] 朝倉淳, 小原友行, 深澤清治, 松浦武人, 松宮奈賀子 (2015) グローバル教員に求められる資質に関する研究—海外での授業実践による自己変容を中心に—、広島大学大学院教育学研究科共同プロジェクト報告書, (13) : 71–76
- [10] 宇塚万里子 (2013) イングリッシュ・カフェ実践報告—4 年間の軌跡とその成長についての考察、大学教育研究紀要, **9** : 89–100
- [11] 清水和久 (2011) 国際交流を題材とした初年次教育の試み—初等教育の成果を踏まえた高等教育における取り組み—、コンピュータ&エデュケーション, **30** : 36–41
- [12] 岸磨貴子, 久保田賢一 (2009) メディアを活用した交流学習が与える影響—青年海外協力隊員とのメール交換を事例に—、教育メディア研究, **15** (2) : 1–13